

児童館は今～「子どもたちが抱えている課題」

大森東一丁目児童館 館長 佐藤 静子

はじめに

児童館とは、児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、情操を豊かにすることを目的として設置、児童福祉にかかる住民の各種のニーズに対応して全国的にその普及が図られ、地域の児童健全育成の拠点として重要な役割を担っている。現在、東京都大田区の児童館には三つの事業がある。

- 1 乳幼児親子への子育て支援事業
- ・ファミリールーム事業

年間を通じて、乳幼児親子のふれあいや仲間づくり、自主的な活動の援助、遊びや子育て情報の提供、「幼児の時間」など子育て中の親達を支える活動を全館で実施している。乳幼児活動のプログラムは地域ごとに作成されている（資料1参照）。

- ・子育て相談事業

現代社会の子育て環境は少子化、核家族化などを背景に、育児能力の低下や育児不安、ネグレクトや虐待、育児ノイローゼを生み出している。日々の育児について気軽に相談できる場として実施している。

- ・子育て講座

啓蒙活動の一環として講座を開催している。地域行政センターエリアを基本とするグループ単位に分かれ、近隣児童館との共同で実施（資料2参照）。

- 2 全児童の放課後遊びの指導

放課後児童の健全育成を推進するための施設である。利用できる年齢は乳幼児（保護者同伴）～中学生までである。

- 3 学童保育（留守家庭の放課後児童健全育成）事業

学童保育事業とは、共働き、一人親、保護者の長期療養等で放課後、保育に欠ける児童に対し、安

全な生活の保障と健やかな心身の発達をめざし援助や指導を実施している事業である。対象児童は小学1年生～小学3年生まで、定員は40名である。大田区の学童保育室は館内に併設されている。最近は学童保育の需要も年々高まり、50名以上の児童数を持つ児童館は半数以上に昇る。そのため学校内に学童保育室（フレンドリー）を新設している。

※ 職員構成

館長1名、児童指導員3～6名までで、学童保育児童数により職員数に幅がある。

以上の事業をケース別に紹介しながら、子ども達の現状と課題にふれたい。なお、ケースは今まで9年間在職中（3児童館）の中から抜粋したものである。

1. 乳幼児親子への子育て支援の現状

〔ケース1〕

泣きじゃくる母（母30歳、2歳男児）

時々来館する母から電話相談を受ける。椎間板ヘルニアのため腰痛がひどく、子どもを抱く事ができない。保育園に入園を申し込んだら空きがなく無理と簡単に断られ困っている。母は泣きながら訴える。さらに、たった一人しかいない子どもなのに満足に育てられないと号泣する。しばらく話を聞いてあげると落ち着いた。保育園の緊急保育に申し込むように助言する。後日、この母が来館し、入園できたことを明るい表情で語ってくれた。母の日常生活を聞く。完璧な家事を望んでいる様子で、毎日の掃除や片付けなどの家事は見事にこなしていた。さらに自分の母親はもっときちんと家事をしていると話し、自分の母親と常に比較して苦しんでいる様子であった。この若い母親を痛ましく思い、「お母さん頑張るすぎないでね」「自分の病気を治すことが大事よ」

と助言する。この母にはいつも声をかけてあげる必要ありと職員で確認し合う。

〔ケース2〕

皆で子育て 地域の輪

A男は3歳児で、とにかく欲しい玩具をみたら、無理やりに奪ってしまう。奪う手段は突き飛ばす、噛みつく、髪を引っばるなどの行動が多く、一時も目を離せない状況である。周りにいる親子は敬遠気味で、A男の母もイライラしはじめてきた。そこで指導員は、乳幼児活動に来館している親達にA男の状況を見守っていることを説明し協力をお願いした。A男の母には、保健所で行われる検診に相談するよう勧めた。A男の母も受け入れ、保健所の勧めもあって区の相談機関に月1回通所した。A男の母は夫に相談したが、夫は我が子の言葉の遅れを認めず、母は夫に内緒でA男を相談機関に連れて行った。そんなA男の母を、来館している親達、指導員、地域の民生児童委員が支えた。A男に対しても暖かい眼差しが注がれるようになった。

乳幼児親子が当児童館を利用するにあたり、何点かの約束ごとを決めていた。以下のとおりである。

- ① 玩具の取り合いがあった時は先に使っている人が優先、欲しい時は必ず「貸してね」と言葉で意思を伝えること。玩具を使用している子は「今使っているの、後で貸してあげるね」と意思表示をはっきりすること。
- ② 約束を守ったら、わが子だけでなくよその子どもも褒めること。
- ③ 児童館デビューの親子には皆の前で自己紹介をし、自分をPRすること。
- ④ 親同士、無理しないで気の合う人と仲良くすること。
- ⑤ 心配ごとがあったら一人で悩まず、いつでも指導員や周りの親達に相談すること。
- ⑥ 「幼児プログラム」には、子どもが嫌がっている時には無理に誘わないこと。
- ⑦ 児童館行事の実行委員には積極的に参加すること。

などである。コミュニケーションを深めるためには欠かせないルールである。

玩具の取り合いなどのトラブルは、最初のうちは指導員が解決し援助した。そのうち親達もできるようになった。指導員は見守り、親達を応援した。親

達は行事にも積極的に参加し、運動会、クリスマス、お別れ会など学生のように楽しんでた。いつも行事に借り出されるのは、民生児童委員の方々、赤ちゃんをオンブしたり抱っこしたりと子どもをあやす。人生の大先輩、若い親達を側面から応援してくれる地域の心強い味方である。

2. 全児童放課後遊びの指導

児童館は現在、失われた地域の原っぱ的存在である。利用する子ども達は殆どが小学生で、ドッジボールや布ボール遊び、一輪車、独楽、剣玉、縄跳び、卓球等が主要な遊びである。当館では、指導員4名（うち、学童保育担当2名）、ボランティア5名（20歳女性保育専門学校生、高校生女子2名、男子2名）のスタッフで、子どもたちの遊び指導を行っている。ボランティアは全員学生で、学校休業日に主に活動している。最近、中学生の不登校児童の来館が増えている。去年は6名の不登校児童が来館していた。今年は午前中から来館する児童は2名である。平成15年度の文部科学白書によると、全国の国公私立の中学生不登校は平成14年度では105,383人、不登校児童の割合は37人に1人と、小学生と比較すると7倍となっている（表1）。中学生の不登校児童の実態を述べながら、今後の対応を探りたい。

〔不登校児童達との出会い〕

平成15年5月、17歳（高校中退）のF男がボランティアとして来館する。F男はハンサムで、スポーツが得意、たちまち、子ども達の憧れの的となる。ドッジボールや「かたき」などの布ボール遊びが活発になった。この頃から中学生や小学6年女児の来館が増え、20人程の集団ができた。中学生は、1年から3年まで女子も含めて10人前後が毎日来館していた。現在不登校のB男、C男、D男、E男もその中に加わっていた。F男を中心に、児童館以外でも花火やプールなどにも出かけ、交友が深まった。以下、個人別ケースを紹介する。

〔ケース1〕 B男（中学2年）

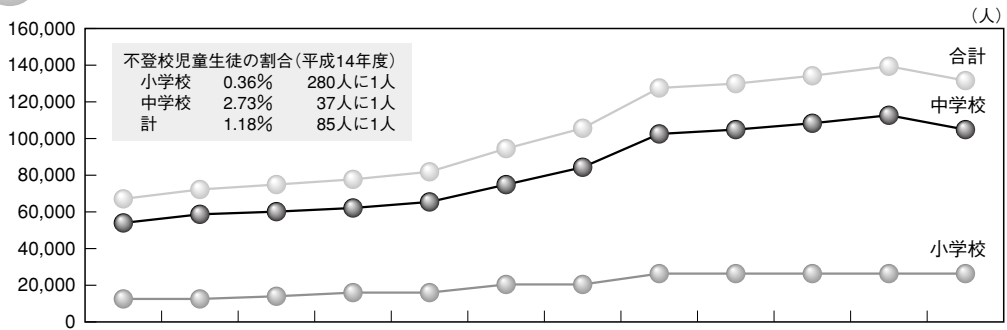
- ① 家族構成：両親、兄（高校生）、妹（小学生）
- ② 不登校状況・背景

中学1年の夏休みから不登校が始まる。原因は部活の先輩から嫌味を言われるためである。

親と学校が相談して、11月から適応指導教室に通級していた。1月にB男が来館し、指導教室でもいじめられていることを訴えてきた。B男の親、指

表1

不登校児童生徒数の推移



	3年度	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度
小学校	12,645	13,710	14,769	15,786	16,569	19,498	20,765	26,017	26,047	26,373	26,511	25,869
中学校	54,172	58,421	60,039	61,663	65,022	74,853	84,701	101,675	104,180	107,913	112,211	105,383
計	66,817	72,131	74,808	77,449	81,591	94,351	105,466	127,692	130,227	134,286	138,722	131,252

(注)「不登校」(平成9年度までは「学校ざらい」)を理由として年間30日以上欠席した国公立小・中学校児童生徒数。
(文部科学省調べ)

導教室の先生、担任とでの話し合いの結果、B男は指導教室をやめ学校に戻った。中学2年の4月、5月と登校できるが再びいじめにあう。休み時間や授業中に同級生に「サル」としつこく言われている。やめるように言うがやめてくれない。担任にも相談したが解決に至らず、不登校となる。

朝、学校に行こうとすると気分が憂鬱になってしまう。腹痛も激しくなり、登校できなくなってしまう。友達が迎えに来る時は登校できる。父親から不登校のことで嫌味を言われることが一番苦痛である、と本人は訴えている。

③ 親への対応

母は不登校を理解している。B男の朝の体調が気になるので、メンタル面も合わせてケア可能な病院を探し、B男を通院させている。学習への遅れでは、自宅近くのフリースクールを紹介し、現在検討中である。母は学校にしがみついただけでなく、外にも目を向け始めている。父親は一度児童館に相談にきたが、B男の不登校に対してはまだ受け入れていない現状である。

④ 児童館の対応

学校へ行けない時は、朝から来館するよう強く指導する。家に閉じこもってしまうと心身に弊害が大きくなってしまいうため、体にとってマイナスであることを常に本人に伝えている。さいわいにも、本児童は足が速く、1年生の運動会では中距離走を優勝している。彼の誇りでもある。来館時間を9時に

設定し、朝一番にジョギングを取り入れている。その後は自主勉強や児童館の雑用などのボランティア活動を行なう。現在は高校生ボランティアE男(平成15年度の不登校児)が時々勉強をみている。基礎学習の遅れが目立つ。メンタルフレンド利用を申請中、今後の課題である。

〔ケース2〕 C男(中学3年)

① 家族構成：母、G男(母の同棲相手)、弟(小学生)

② 不登校の状況・背景

夜遅くまでゲームをやっているため、朝起きられず、休むことが多かった。運動会前に同級生から学校に来るなどと言われ、不登校となる。不登校の主な原因は、本人の申告によるといじめが30%、勉強の遅れが70%だという。朝制服を着用し家を出るが、学校に行かず図書館などで時間を潰していた。今年の6月にボランティアのE男が気づいて、児童館に知らせ発覚した。C男はどうしても母親には言えなかった。事実を学校から知らされた母親は激怒し、母子の関係が悪化した。E男の頼みもあり、児童館で母親と話し合った。母親には担任とよく話し合うよう助言した。C男には、とにかく学校に行けない時は児童館に来るように説得した。E男の応援もあり、9時～10時頃には来館するようになってきた。C男の生活は、ゲームをする時間が一日4時間と非常に多い。少なくするよう指導し、音楽や読書などを勧めている。本児童は漢字や朗読が得意で、

自宅や児童館での自主学習もまじめに取り組んでいる。

③ 親への対応

母は、今まで人からいじめられたことがない。C男がなぜ学校へ行けないのか許せない、と怒りをあらわにする。母は本児童を嫌味たっぷりと責めるのである。例えば、不登校でも修学旅行には行きたいという、そんなことをいう資格がないと軽蔑してしまうのである。個別に母に、親の思いを聞いてみた。20歳でC男を産み、離婚をし、育児は祖父母に任せた。

中学生の頃、両親は世間体ばかり気にするので、反抗ばかりしていた。非行を繰り返していたので、親に死んでくれと首をしめられた程だったこと。また、C男が伯母さん（母の姉）に父親に会いたいと言っているなど、母の胸の内を語ってくれた。

母親は一人で苦しんでいたのだ。一人で悩まず学校にも相談すること、また、子どもの気持ちに耳を傾けてほしいことなど助言した。

④ 児童館の対応

C男は祖父母に可愛がられて育ったためか、やさしくおっとりしてまわりからも好かれる。無口だが感性も豊かで自己主張もできる。学校とも連絡を取り合いながら、登校できないときは児童館で過ごせるように検討した。後日、新たな問題が発覚、ボランティアのE男がC男から相談を受けた。相談内容は、母親と同棲しているG男から母親が暴力を受けているというものであった。G男は機嫌が悪くなると、手当たりしだいにビンなどの物を投げたり、窓ガラスを割ったりして、暴力が激しい。早く出て行って欲しいと母親に訴えているが、しょうがないと取りあってくれない。家を出たいが弟が心配で出られない。児童館に言えなかったのは、おおごとになるのが嫌だからという理由であった。弟を思い一人で背負おうとしていたC男の健気な思いがあった。「つらかったね、よく話してくれた、おおごとにしないで家族を守ってあげるから」と励ましている。家庭支援センター、児童相談所、学校、ケースワーカーなどと連絡を取り、現在検討中である。

【ケース3】 D男（中学3年）

① 家族構成：母、姉

② 不登校の状況・背景

中学1年生の9月に母がD男の不登校について相談に来る。母の話によると、小学校高学年の頃から

いじめを受けていた。中学に入学するといじめはさらにエスカレートした。休み時間にお腹を蹴られたり、パンチされたり、机に「死ね」と書かれたりした。中学1年の2学期から不登校が始まった。母親はいじめについて、学校に何度も足を運び担任と話し合いを持った。その結果、区の教育センターや他校の相談学級、塾などに通わせることで解決をした。現在は相談学級に通い、放課後は児童館に毎日来館しB男やE男、C男とボール遊びを楽しんでいる。

今年の6月にD男が近くの公園で遊んでいたところ、同じ学校の生徒（小学校からD男をいじめていた子ども達）から恐喝され、断ったら暴力を振るわれた。恐喝された金額はタバコ代の300円であった。恐喝した子ども達は、学校ではクラブ活動も積極的にやり、親にもいい顔を見せている子達だそう。母の怒りは頂点に達した。その対応をめぐって学校と対立が深まり、現在では信頼関係が崩れている（母からの報告）。

③ いじめの土壌・児童館の対応

現在の児童館に異動（3年前）して感じたことは、日常的にいじめが横行していた。館内でもD男は年下の子や同級生からバカにされていた。以下、いじめと思われる点をあげる。

- ・足が悪い男児（小学4年）に、小学6年の男児（ボスの存在の子）が、無理やりパンツを脱がせようとしていた。

- ・小学3年の男女にそれぞれ一人ずつボスがいた。ボスの周りには3、4人の子ども達がいて、常にボスの顔色を見ながら行動していた。ドッジボールなどでは決してボスにはあてないなどの気の使い振りである。遊びを決めるのもボスである。ボスの周りの家来的な子どもの中には、いつもバカにされている子がいた。

- ・小学校が小規模学校（学年によって1クラスと2クラスが半々ずつ）のためか、ちょっと目立つ子や弱い子がいると全学年の子ども達によって、「パーカ」「死ねー」と言われたり、名前を呼び捨てにされる、靴を隠されるなどの行為を受けていた。

D男はまさにこのような扱いを受けていた。館内では、日々の遊び指導の中で、善悪の判断をきちんと知らせ、守らせるよう取り組んだ。一人ひとりの思いや気持ちを相手に伝える指導、遊びの充実などを検討し、全職員で「いじめ」に取り組んだ。

④ 児童館の対応

D男は中学1年生から殆ど毎日、放課後來館する。自分からは挨拶はしない。特定の友達もいない。時々小学生の1、2年生に声を掛けている。布ボール遊び以外は一人でゲームをしていた。布ボール遊びでは、仲の悪い年下の子とトラブルをよく起こしていた。

指導員に注意されると、「バーカ」「死ね」「ウルセー」と反抗的であったが、日々の指導員のいじめに対する姿勢をみて、不正な行動に対して指導員に報告するようになってきた。

また、来館時にも指導員の挨拶に応じるようになってきた。平成16年2月、母が2回目の相談にやってくる。D男が家のお金8万円を2回に分けて盗んだ。事情を聞くと、児童館で遊んでいる子たちにお菓子を奢ったり、自分が遊ぶゲーム機を買ったという。児童館でD男、職員、母の3人で話し合った。母からの報告によると、盗みが発覚した夜に姉が怒りD男が大事にしていたゲーム機を窓から捨てた。D男は激しく怒った。ゲーム機の話になると「誰も自分の気持ちをわかってくれない」と泣き出す。その日は母親が怒って先に帰ってしまった。D男は児童館の階段に座り、膝を抱え泣きながら「死にたい」と訴えた。はじめて聞く言葉に戸惑い、ただ、黙って泣いているD男の背中をさすった。後日、お菓子を奢られていた子ども達（中学生、小学生）と、ボランティアを集め、話し合いをした。話し合いの中で、子ども達は「お菓子を奢ってもらわなくてもD男とは友だちだよ」と言ってくれた。最後に指導員が「どんな子どもや大人でも命は輝いて大事だよ」と言ったその後に、D男はすかさず「俺も？」と聞き返してきた。「そうだよ、当たり前じゃない」とまわりにいた子ども達全員に言われ、嬉しそうであった。その笑顔が印象深く、いつまでも心に残った。気持ちを伝えることがほとんどなかったD男は、この時から児童館での会話がふえてきた。今では帰りの戸締り、椅子上げなど積極的に手伝っている。D男がこれまでどれ程傷つけられてきたか胸が痛むが、心が癒されていることは確かである。

〔ボランティア〕 E男（高校1年）

- ① 家族構成：両親、弟
- ② 不登校の状況・背景

小学校5年生から、女っぽいと言われ、登校できなくなる。小学生の時は児童館や自宅にいた。中学

入学後まもなく、大勢のクラスメイトに廊下で胴上げをされ、そのまま床に落とされる。それを機に不登校となる。不登校の間は、保健室登校や空き教室、相談学級などを転々とする。家庭では母親に学校に行くことを強要され、家中包丁を持って追いかけまわされた経験もあり、その時は怖かったと最近では笑いながら話してくれた。E男とは前児童館で知りあった。昨年の秋に、今までいた児童館と折り合いが悪くなり相談にきた。当館は17歳のF男がいて活気づいていた。皆で楽しく遊ぶ雰囲気が気に入ったようである。その後E男も頻繁に来館するようになった。中学卒業後は高校に進学し、当児童館のボランティアとして活動する。

③ E男のボランティア活躍

E男自身も不登校を経験しているので、3名の不登校児童には親身になって相談にのっている。特にC男には、E男が通っている高校の見学や、学習の援助など、積極的に関わっている。そういう関わりの中でC男は複雑な家庭環境を語り始めた。E男はC男の環境に驚き、職員に伝えてきた。まさにE男がいなかったらC男の実態がわからなかったであろう。彼の熱意である。F男がボランティアをやめたため、今年からE男が中心的に活動している。彼の得意は集団遊びである。小学生から中学生まで楽しめる「だるまさんが転んだ」は大変に面白い。また、彼が時々使う女性言葉に皆はおおいに受ける。不思議な魅力を持つE男である。

3. 学童保育室事業（留守家庭の放課後児童健全育成）

学童保育の子ども達は、授業終了後、ランドセルを背負い「ただいまー」と帰館する。それまでの学童保育室は乳幼児親子の遊び場で静かな雰囲気であるが、小学生が帰館した途端一転するのである。赤ちゃん達や若い母たちも帰り支度をしながら「お帰り」と迎えてくれる、微笑ましく賑やかな時間帯でもある。当学童保育室には35名、近くの小学校内の敷地にある分室には、40名の児童が在籍している。一般来館している子ども達とボール遊びや一輪車、工作など思い思いに遊ぶことができ、子ども達にとっては大事な時間である。

〔ケース1〕 A子（小2）、母からの虐待

- ① 家族構成：義父、母（フィリピン人）、妹

A子は800mも離れているた学校から、児童館へ

一人で通っていた。学童保育申請時に、もっと近い児童館を勧めたが、父親は母の職場が当館と近いことを理由に入室した。A子は1年生から言葉がきつく、他の児童とよく喧嘩をしていた。学校でもいさかいが絶えないと担任からも聞いていた。原因は言葉より先に手が出たり、本人がイライラしていることであった。丁寧な対応が必要であったため、帰館時は必ず声をかけていた。「お帰り」といつものとおり頭をなでると、「あのね、お母さんがわたしの手をフォークで刺したの」と訴えてくる。見ると確かに手の薬指のあたりが瘡蓋になっていた。もう古い傷である。詳しく聞くと「お父さんとオセロをしていたら。お母さんがご飯だよと呼びに来た。だけど、まだ終わっていないので最後までオセロをした。そしたらフォークで刺した」と話してくれた。「誰もいないところでつねられる」こと、「お父さんは知らない」ことなどがわかった。学校に連絡すると、担任には「お母さんが間違って刺したの」と母をかばっていた。足の内側大腿部に2箇所ほど大きなあざができて青紫色をしていた。ちょうど母との面談があったので、思いきって母に事実を聞いてみた。母はかなり動揺していた。つねったことは認めたが、フォークで刺したことは認めなかった。母親には日本は子どもに暴力を与えると罰せられることを話した。夫にも同じことを言われていると頷いていた。その後A子からは暴力の訴えがなくなり、ほっとしている。

終わりに

毎年、児童館や学童保育室では小学1年生を迎えるが、私は1年生の出会いを大事にしている。子ども達はたくさんの課題や、SOSを持ってやってくるからである。6年前、体をグニャグニャさせ、集中力がない子と出会った。その時、保育園（保育士として18年間保育園に勤務）の子どもたちを思い出したのである。当時の年長組（5～6歳）の子ども達の姿は、椅子に姿勢よく座っていたはず、赤ちゃん泣きの子は居なかったはず、もっと上手に箸を使って食事が食べられたはず、こんなに冷めた目をした子どもはいなかったはず、人が持っているものをすぐ頂戴とおねだりする子は居なかったはず、等々である。あげればきりが無い。子ども達だって変わりたくて変わった訳ではない。1年生をもう一度保育園児に戻してみよう、ということからスター

トした。椅子にじっと座ってられない落ち着きの無い子どもには泥だんご作りや、水、粘土等を使った感覚遊び、赤ちゃん泣きをする子には3歳児の保育に戻り、ままごと遊びや模倣遊びなど、「ごっこ遊び」を中心に取り組んだ。また、冷めた目をした子には毎日声をかけ、頭を撫で可愛がった。人の物を欲しがる子には、人には誰にもあげられない大事な物があることや我慢することなどを教えた。喧嘩の仲裁に時間を取り、お互いの気持ちを聞き、また相手に自分の気持ちを伝える作業を繰り返した。そして子ども達の気持ちに寄り添った。子育てには時間がかかるのである。そんな日々の繰り返しの中で、2、3年生の子ども達はケンカが起きると「自分たちで解決するから見ていいよ」と誇らしげに言い、自ら解決するようになってきた。うれしい限りである。今、小学1年生たちは一輪車に夢中である。どんなに転び、足に痣ができて、痛くて泣いても、「ミテテー」「ミテテー」と大人を呼んで、そして頑張るのである。大人の目が欲しいのである。頑張る姿をしっかり受け止めて欲しいのである。

最後に、私がいつも子ども達に送っているメッセージを紹介し、締めくくりとしたい。

「人の心は不思議だよ、楽しいことを誰かに話してごらん。楽しさが風船のように大きく膨らむよ。

悲しいことや嫌なことを誰かに話してごらん。なんだかすっきりして元気が出てくるよ。

だから何でも話してごらん。いつでも聞いてあげるからね。」